士官心得外療一斑

186
205

058521-000-8

186-205

外療一斑（士官心得）

近藤　誠／訳

M1

CBC-0039

士官心得外療一斑

186
205

序

海軍醫務局

蓋聞古之克壙士咎利也善人被創者頗多醫不能治蓋將乃意近使求醫於壙人醫甚古名而壙之武疑以為壙人戰者而主使人不能抗於家何豈近醫而療敵人乎以使者

大正
6. 5. 18
寄

其力之為吾武夫吾我而傷之吾匡又從而齊之此且不如勿戰也全曰不然夫攻者使敵不能拒之中者使敵不能進吾不拒則敵城不攻不進則我莫可全吾整而以沮其事也決器而以擾其事

也不必拒敵進吾之意伸吾之理而已夫驚而不出冒進而敢來於是吾觸而備者豈至國君之所快哉夫所謂孫武不殺者吾威畏之乎然則敵人之被創國不能不惻然於我之決惻之矣吾使者

来清與ニ道也洞若唯而退
余時抄海軍必携ノ譯ニ
乃以是言為序云
戊辰三月昌平黌小史誠撰
茅書

凡例

海軍必携ハメモランダム、ホール、デン、イウグヂヘンセーオフヒシール」ト云フ少年海軍士官必携ノ義ナリ和蘭海軍一等士官「スハンレース」氏「ブリュテル、デ、ラ、リフヒール」氏合著元来英ニ「マヌール、ホール、子ズル、カテット」ト云フ書アリシヲ義譯ニシ増補シタルモノナリ窮理器械造船船具船砲汽機運船律令官制測暦旗号等ヨリ内外醫術各國度量ノ比例和蘭海岸ノ深淺ニ至ルマテ皆コレヲ略載ス今爰ニ抄譯スル外科術ノ篇

ノ如キハ全ク「レース」氏「リフェール」氏ノ増補ニ係ル

一人急ニ病アルニ方ツテ医官共慶ニアラザレバ急ニ
コレヲ招キ若クハ患者ヲ送テ医官ノ處ニ至ラシム
病劇ナルニ遇ヘバ未タ医ニ逢フニ及ハズシテ性命
既ニ危シモシ士官僅カニ病理ヲ知ル者アツテ看護
其法ヲ得セシメバ病トトルハ必シモ医官ヲ俟タス
レテ治スヘシ病大ナルモ性命ヲ維持シテ医官ニ逢
フノ期ニ及フベシ而シテ創傷最然リトス故ニ外科
術ノ概略ハ士官ノ宜シク心ニ記スベキ事ニシテ予
カ此抄譯ヲル所以ナリ

一予素ヨリ人身ヲ知ラズ文意ヲ謬リ以テ事ニ大害ヲ
遺サンヿヲ恐ル疑フ所ノ如キハ本藩ノ医生安藤尭
民ニ問ヒ其實驗ト予カ私意トハ一字低ク記シ以テ
注脚トナス譯成テ後尚就テ校正ヲ請ハントス刊行
ニ急ナルヲ以テ果サズ看官不可ナリト思フ所アラ
バ請フ幸ニ教ヘ玉ハンヿヲ

一原本圖アリ本文ノ間ニ挿ム又予カ覺ク所ヲ以テ新
タニ加フル者ハ註譯ノ間ニ挿ム

一原本物ノ長サヲ記スルハ「エル」「パル」「ドイム」ヲ以テ
ス予直チニ邦尺ニ改メテ幾尺幾寸ト記ス皆曲尺ミ

一本篇砲傷ノ論ヲ載セズ蓋シ骨節ニ中タル者ハ必ラス真ノ医官ノ手ヲ待ツベク骨節ニ中タラサル者ハ別ニ子細ナシ刀傷ト火傷トノ療法ヲ参考シテ足レバナリ然レ𪜈其詳ナルヲ知ラント要セバ大槻俊齋大子ガ著セル銃創瑣言佐藤舜海夫子ガ譯セル斯篤魯默兒砲瘍論アリ

一此書固ヨリ医生ノ為ニスルモノニアラス水夫火夫ニ至ルモ讀ミ易カラシメント欲ス故ニ語ハ務メテ俗ニ従フ讀者幸ニ浅陋ヲ笑フ勿レ

慶應四年戊辰閏四月　志摩　近藤誠識

士官心得外療一斑目錄

傷ノ取扱ひ并ひ出血の防き方
手足の疵〻〻血の出る時の心得
頭胸腹の疵〻〻血の出る時の心得
鋼血の取扱ひ方
水蛭の口より出る血止〻ざる時の取扱ひ方
刺絡の後の出血止らざる時の取扱ひ方
脳卒撲〻〻氣絶したる者の取扱ひ方

挫折の心得
火傷の取扱ひ方
撲傷の心得
内臓のちがひ位置あらくなる時の心得

傷の取扱ひ出血の防ぎ方

傷ふ切り疵。突き疵。なま疵。打疵。ものふかきまきかた疵。

毒虫ふさゝきなる疵等あり。又其大小にしたがひて。いさゝかの疵。大切なる疵。危き疵。命かゝわる疵等いろ〳〵あり。さ〳〵疵の深さと。疵をうゝたる場所とをみまして。疵口より出ふ血をのゞの止るもあり。忽ち死みいたるもあり。血を疵に受けるとき。直ちに出る事通例なれども。

打ち疵。物ふれさまたる疵ちどか於てち。其時ち血ち出でゞ。時をぎていでたじまる事あんバ。かゝちる時ち。能くその手あゝ城ち〜おゝ〜。元来血ち。日夜間断ち〜。人身の内城めぐふりめ。そして其本根ち心の臓ちう出づちうれちう樋をちるゝ。人身躰の諸方へ贈ち。此道城動脈ちいふ。心のぎう城出づる所ハ。太くして水の幹の如く。それちう枝葉の如く。次第ふ細く立別ち来ふ至りてち。内眼ちを見ちもぬかちみ。躰中処々の機械ち養わい。変ドて静脈ちなれ。静脈ち再び心のぎうのかちく立戻ち樋ちうれち始

細く。次第ふ太き枝ちなち。又集りて幹ちなち。心の臓ふ入ふ。

静脈ち上ふ浮き。動脈ち中ふ沈ちてあるものち。人身ふ青き筋の見ゆるち静脈ち。脈めうい所ち動脈ち。大てん動脈ち静脈の下ふあるものち。動脈の血ち紅ふ〜て澄ミ。静脈の血ち黒ミ城わゞ〜濁るゆゝふ見ゆ。動脈ふ疵城うけちる時ち。心の臓ちう其疵口の方へ来る動脈の道城。強く押つけて出血城とめる事あち。たゝくバ足の動脈城やぎる時ち。股城押へ。手の先或ひち腕の動脈城傷る時ち。二の腕ち押へて血城

止る事なり。靜脈ハ傷るときハ。瘢口ハ高くして押て布ハ
ハ高くなかりふくるも血をとまるものなり。刺絡として腕
のつゞひの内の方の靜脈ハ刺して血ハ取る療治あり。
らの右のいひたる事のとき證拠なり。刺絡の時ハ先づ
紐ハ二の腕ハかゝふ。ゆるして腕と手の
さきとゝ戻る血を心のざゝの方へ行く事能ハず。又動
脈ハ靜脈の下ハ沈てある故この紐ハ強くを押されて
ざるバ手の先へかゝる血を止まゝ。この時紐より手
の先までの脈を腹き上りて綱のゝゝハ見ゆるを全く
右の故なり。さゝ其腹き上りたる処ハ高くゝ刺を

時ハ血を走り出ふなり。そのゝち括ハ解きゆるめ
ハ血をとゝまるを瘢口へ木綿の切ハ四つハ折りて當
て。其上ハ布ハ巻く時ハ再ひ血ハ流き出づる事なし。此
事ハ以て考へきバ。瘢口より出る血動脈より出る血。
靜脈より出る血ゝとハ事ハ知るを第一の事なり。
動脈より出る血ハ脈のうつ調子ハつゝ突き出を如
く走り。或ハ瀧の如く走る。其色を常ハ紅ハして澄り。
靜脈より出る血ハ脈ハつゝる事なく。涌き出るゆゝハ
流き出づ。其色を赤くして黑くあり。
大動脈ハ傷るときハ。血の出る事勢ゝ。とめがたしハ

幾数分時の間ハ命危ハ事あり。小動脉の疵ヲおのづから血の止る事もあれども。動脉の疵ヲたとへ枝脉ヲ。大抵ヲ血域多く失ふ中へ。身躰の大害となるものなり。

大静脉域傷るヲ。動脉ハ危きものなれども。害ハなほ軽し。静脉の血域失ふ事ハきわめて少し。さきども静脉の血ヲ流き来る勢ひ強ければ。血域止ることなかやすし。小静脉の疵ヲ大切なるものハあれど。打捨おきても。おのづから止る事多し。但し其処と心の臓との間の静脉域衣類其外ハ押へてある時ヲ甚だしき故ハ心域使けてとめ域取り除くべし。

疵口より出る血ヲ速ハ止むべし。血の出る事夥しき時ヲ遂ハ疵口より出る血ヲ速ハ止むべし。血の出る事夥しき時ヲ重ねて。血域多く失ふ時ヲ精神疲労身躰衰弱又ヲ水腫等の諸症域おこせいたり。

胸或ひヲ腹ハ疵域受け。内臓より血の出る事あり。ハ〻の疵ヲ士官の手ハ〻ヲ療治し難し。かヲ〻真の医官の手域待つべし。

出血域止むる法三つあり

一 疵口ハ〻血域塊しセ。血の出る口の栓とするもの

事。

二　疵口に成たるを押しぼまし。動脈靜脈に成ひたる其血管の本根の脈に成たるを押しつまる事。動脈の時

三　切きれたる脈管の端に成括り。或ひハ切られ膏に成たる。又ハ疵口に成逢ふ事。

流血出る血に成速に塊まりしもの　冷水或ひハ雪氷などに成洗ふに成たるもよし。又ハ明礬の赤アラビヤゴムの末海綿もよし。

原本ハ此外脂「ハルス」の末「ハール」「ステイプセル」「トンデル」「スワム」の片髮「ペンガワル」「ヤムビ」などのせたり。

きれたるも菜性明らかにさぶ血留を用いざるべからしとて和蘭の医「ポムペ」氏の話しに先年和蘭人急病に成刺絡し。血留に海綿を用いたり。其後二年ばかり。三年に成血液の循環宜しからざるゆへに成て死したり。不思議の事として解剖して見しに心の臟に海綿の片髮入りてありし由。されバ疵口に膏菜を張り。其上に血止に成着ケし。

又原本に。疵口に成寒き空氣に當る成たるとき成る由のせたれども。と色ふたりて破傷風とある事もあるバ。疵口を風にあてぬやうにし。

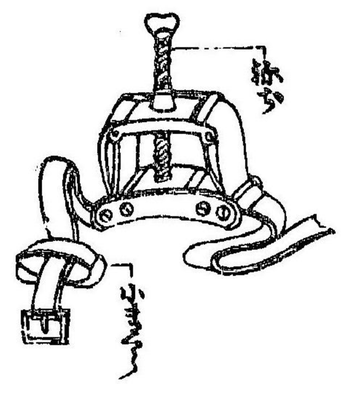
血の止りたる時速に疵口に布を巻くべし。布ハかハきたるものを用い。あまり強く引しめぬやうにすべし。さて其怪我人ハ躰に無理なる所なきやうに休せ置べし。なるべきたけ涼しき風にあたらしむべし。塊りたる血の落ざるがためなり。

出血を止るとてこれを押へる ハ或ひハ指を以てし。或ひハ巻木綿の道具。又ハ「トールニケト」といへるものを用い。疵口或ひハ其近所。又ハ其脉管の本をしめて押へるなり。然るに其道具ハ常に手元にあるものにあらねバ。又手にて押へらるゝハ。道具なくて揩ておくよりハ楽なれバ。なるべくハ手にて押ゆべき事なり。大切なる動脈を傷りて血多く出る時ハ肌へなりとも其疵口をしかと指にて押ゆべし。品によれバ衣の上より押ゆる事もあるべし。さて押へて居りながら。衣ハ他の看病人これを脱すべし。又時によりてハ切り解き。或ひハ鋏を剪りて。血管をしめと括て或ひハ動脈の本の方に「トールニケット」をかくべし。血を失へしめぬやうにすべし。其命を救ふに至べし。

静脉より出る血ハ衣類其外其血管を押へくあてるものを解きくつろげ巻布をし。又ハかうがん膏を短冊なりに切りこれを張りおけバとまるものなり。大ていハこれにてとまる

ものなり。

「トールニケット」を二種あり。通例のものを「セームレール」と云ふ革黄色なるもの、手ぶくろの如きもの用ゐるもの革にて作りたる小枕。幅一寸ばかりの紐にて左右自在に動くやうにしたるものなり。但し小枕をかたく詰めたるものなり。用ゐる時は此小枕を動脈の上にあて。血の止るまで紐を固くしめるなり。今一つは銅の袋にて作りたるもの



袋のつきたる「トールニケット」の圖

にて。紐にてよく〳〵堅くしめ付け。動脈にてよく〳〵押付らるるやうにすべし。もし二股の道具なき時は羅紗或いは革の。幅一寸ばかりの紐。又は頭飾りの紐。或ひは手拭にて代用ゐ。小枕の代りにも羅紗の紐にかたくうづ巻にする。又は「キルク」(徳利の蝋燭のこと)にかまなどを。鈕或ひは銭にて代用ゐる所肉の上に当てぬやうに氣にて着べし。布にて幾重も包むもよろしく為なり。されば「トールニケット」にても直に肉にあてゝ先づ羅紗或ひは木綿の細き切にて巻き其上にかけるべしとも然らざれば長き間に痛み

裂し。或ひは燃衝撞し生じ。品物をもバ脱疽となる事もあるなバなり。又外傷何にも用ひ難きものなる時は。かなきんの風呂布。又は手ぬぐひなど裂き。二つ結び合せ。結び目裂動脉の上に當て。小枕の代りとし。余りは左右より下へまはし。血の止るまで十分に引しめ。両端ハもとの結び目の上に再び結びとめるもよし。

「トールニケット」の紐は。ひつき組糸。たゞ〳〵の類ハ。そもそも。されバ仮りに作るべし。刀の下緒なども然る事なり。

「トールニケット」は。怪我人裂外の処へおくり遣ハし。又急ハ医官の手裂借り難き時などハのミ用ひる事と心得べし。かゝる時に臨みあるべしバ。たゞちに指を押へ押へ用ひる事なり。指を押へしバ怪我人も堪へ易く。紐ハ指て指りあるゝ。きは静脉の通ひあるゝなる故ハ。痛み裂起こし。又ハ瞳るゆゑに覚へ。或ひは爛れ裂れ。痳痺をおこす事あるものなり。心利たる看病人二人あるゝ折は代り合ふ時は。一小時半時づゝ交に押へ居るゝ。但し仇の無あるゝ。一と処ハのゝ指のあるゝぬゆゑに。ぬゆゑに。

動脉の切れたる処裂括るは真の外科術の事なり。

撮ちき時ち素人みゝもねもゝ。但し心ゝ有ちゆゝ。
慌てゝ且つ手早くもんゝし。
動脉の切口ち。疵口ゝ能く改めゝ見ゆるも
のち。其時蝋ゝ引きち。絹絲ゝ。其血管の端ゝ有ち
と搭り。血ゝ止るち。然もゝ血管ち強きものち
もバ。おのづゝ縮ゝ周圍の肉の中ゝ潜り入て。見難
き事もあり。切口ゝ時ゝ過もバいよゝ然りゝ
動脉の見中ゝ時搭るの法ち。蝋ゝ引きち。絹絲の長さ
六七寸ばかりち。ゝ取り。其動脉の太さ程ちり或ひち
一重、或ひち二重もし。一つ結びゝ大ち輪ゝ作ゝ

鉤子の先ゝ此輪ゝ通し鉤子の先ゝ切口ち動脉の
端ゝ挾ゝ。いきゝ。この引出さ。此時一人ゝ手傳ゝ
輪ゝ入ち糸ゝ血管ゝ方ゝ入ちゝ。て。ゝ。
てゝ。ゝ搭ちゝ。ひとゝ結びゝ十分ち。ゝ
動脉ゝ搭る事ち。出来もバ。押てち。ハ過ち優もり。
本文ゝち一つ結びゝ。ゝ。
ち。今一つ。ゝ。ゝ。ゝち止
絲ゝ蝋ゝ引くち。灌入時ゝ。ゝ。黄蝋ゝ指の先ち
てち。いきて用ゆゝち。
又其切口ち。脉の本ち。ち所ゝ内ゝ割き開きて搭る

法あり。これハ人身の結構外科術解剖学術の規則ゆ明らかなるべきハ難き事なり。

かさぶた膏ハ切きたる肉ゝ元の如く粘着セしむる為ゆ張るものなり。これ又兼て出血ゝ防ぐたゆ用ゆる。

瘡の大小ゆよりて膏薬ハ幅六七分或ひハ八九分ゞゆ。長さ三寸余ゆ切り。切きたる肉ゝ双方ゝ寄せつゝ後ゆ張るべし。静脈の瘡ゝとゝさゝれのゝみて事足ることゝ多し。

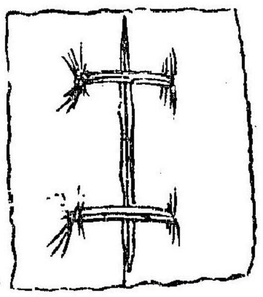
瘡口ゝ縫ゆゝ平たゝしして孤なる迂りたる針ゝ用ゆ。

ゝゆ蝋ゝ引きたる糸ゝ通し。瘡口ゝ凡一分五厘ゆ

ど隔りたる処ゆ突入き。瘡口ゝ通して向側ゆ引通して結び留る。

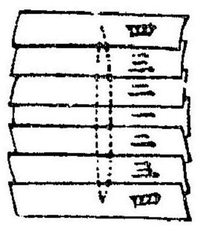
瘡の大ゆよりて二ケ所或ひハ三四ケ所以上縫ゆ事もあり。糸ゝ結ぶ時。一人ゝ針ゝ手傳ひ。肉ゝ双方ゝ瘡の処ゆ引ぱり寄せ合せゝ持て居るべし。

瘡口ゝ縫ひたる図

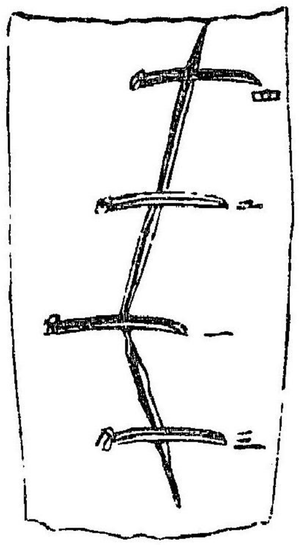


かさぶた膏ゝ張る時も。針ゝ縫ゆ時も。先つよく瘡口ゝ洗ふべし。血の堀りどつきゝある時ゝ。肉ゝとられゆ坊ぎゝまゝ粘着する事ゝ得ず。又血の堀りど肉の間ゆきたる事ゝあるゝ其ゝ口ゝ塞ぐゝきゝ。これ

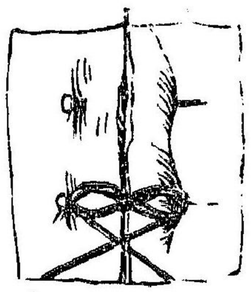
膿ハ醸さものなり。先年撃剣家の関根某といふ
ものあり。人の疵まさに斬り悲しうばなれハ縫ハせ
しに。日数ハ経て其疵口痒ミハ覚ふ。良医これハ見て。
元ぬひ時洗ひやうのあらさかなるかい付き再び
解き膿ハ去り。なほ有ひ。更ハ縫ひ。のば。
ハ面全く本復したりといふ。此類尚多し。
膏薬ハ張るよりも。第一ハ疵の中央ハ
なり。夫より。下の図の如く。次第ハ端
の方ハ寄る毎。疵の端より
ハ外ハ至るまで張る毎。縫ふ時も



中央ハ先ぬし。両端を後ハする事なり。又曲りたる疵
ハ其曲りたる角ハ縫ひ
始まる事と心得毎。
疵ハ縫ふハ先つ盡く糸
ハ通しおき。皆通し終りた
る後ハ疵ハ引きためく結ばなり。糸ハかきるハもしハ
ハ去めるハし皆右の順ハするなり。
又帽子針ハ糸のものハ縫ふ事あり。其縫ひかたを皆
前の法の如くなれども糸を通さず。針ハ肉ふ通しなる
まるハおきなるハ糸ハ輪ふ巻き。或ひら手ハ引かけ



ておくなり。これを肉に寄せつまり開く事なきを爲なるなり。さて其上を此糸針の拔まざるを結ぶ。巻き布にする事なり。



此縫ひ方を多くとも大事なるものなれば。馴まざる者あらをなし難き事なり。されば軟やかなる革鯨髭に以て針を代用なるべし。

馴まさるもの此縫方にあさんと思ひて。銀の針にて一とを。銀の針なれば痛みに覚ゆる事甚しかるべしなり。

手足の疵より血の出る時の心得

手足に大なる傷に受る時は。動脈より夥しく血の出る事なれば。速に止めざれば。忽ち死に至るものなり。されば其疵口の近所又は其本なる動脈に押へなどして。時刻に移さず出血に止るべし。

道筋等平生に心得て居る爲なり。

手の動脈

手の動脈は腕の内の方、肉の間に沈てあり。其始は胸より發り横の方へより。前の方頸の下に至り。曲りて肩

の下より腋の下ふわりもむき。二の腕の肉の方ふ至る。此道々伝つる間に。絶へ炎細き枝状上下左右ふ出して周圍の處々ふいたる。さて本道ち二の腕の内方ふ添ひ。腕の方に下る。この処ふ両頭肉デ空ホーフ、スピール」といふ肉なり。これち手状握りて肱状曲げる時。腕の肉脹き上ふ。この肉の事なり。動脉ち此肉の内のかつこの端ふ至り。肱の曲りの内の方ふ両條ふわつかき。何れも腕の内の方状通り掌ふ達し。両條一緒ふねりて輪の形となる。これより細き枝出て。指の左右状傳ハり指尖まで至る。静脉ち其道大てん、動脉ふ添ふものなり。太きものち皮の上より見ゆるものなり。皮の上より見ゆる静脉ち血管状心の臓の方へ返ち道なれば。手の先より腕二の腕状経て腋の下ふ至り。肩の骨の下状通りて胸乃方ふ至る。

指の疵より血の出る時ち疵口の左右状指ふ〳〵ちからと押へ。血ふ止りたる時冷水ふ〳〵洗ひ。疵口状双方より寄せ。かつがつ膏状粘る。又其上状二た巻ほどの巻〳〵帯し。大てん ち色ふ〳〵十分ちふものち。

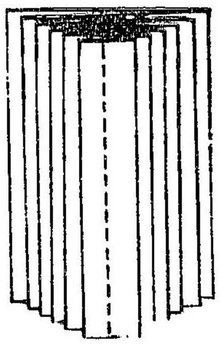
指金〳〵切き離きたる時ち。右の法ふ〳〵ち十分ち〳〵ち原率あり。其時ち先づかつがつ膏状短冊ふ切りて。指の切

きゝ口に巻き。別に此膏やゝ強かゝゝ巻つけて。真書筆の軸位の太さのもの位こゝらこゝ。これ指の左右のそし、動脈の在るところにあゝ。動脈より出る血の其余血の滲出る処より。綿撒絲或ひは「コムプレッス」といふもの強當て。細き巻布強してわゝゝ巻る。

綿撒絲を晒木綿の切の強切り。濃強切りつゝ。て取た綿を強たゝる糸なり。これ疵口に並置覆ふ時は。後ふ流出る血ちこれに滲こゝて流る。其間に塊りて自ら血留となる。これ強に厚さを疵の中央に一分位ゝ。

「コムプレッス」は。きゝゝ木綿の切を強大小いゝゝ強

三角形にまきり。圖の如く大なる強下に。次に小なる強上に。幾枚も重ね中強糸にてとめたるものなり。これ又血の出る疵口にあてゝるものなり。但し小さき三角の方強疵口に當てなり。因に云疵口にあてる布に「ロンギエット」といふあり。



また長きし木綿強短冊に切り。圖の如くなゝみ。中なる強糸にて縫ひて用ひ。

手の先きの切疵傷

ことさゝ掌の傷なり。血の出るる最も

甚だ容易ふを留まぬ事多し。掌より血多く出る時は疵の上を押へ強く押ゆべし。されども出血留りたるバ。脈管の切れたる。を拾ふを支。出血留まざれバ手くびの脈処を押ゆべし。掌の動脈を両條みつゝきて血を止めるものゝ。手くびの脈処ハ其二管大てゝ相近く並びある処ハ。両條を一緒に押へる事の出来るを唯此処のみ。但し手くびの脈処を押へるふを。両手の拇指脈処の凹たる所を。他の指を下ゆ回して押へるなり。血の止りたるを時海綿と冷水にて疵口を能洗ひ。尚ほきて居る血を洗ひ落し。表類の切硝子釘骨の片屑、竹木の刺あるひを銃丸などの如きもの。心に着て取り去り。疵口を双方より寄せ合せ。かさぶたを疵口の上を覆ひ。掌を甲ふ回して張る。其上ゆ綿撒糸を布きるゝ。或ひを綿撒糸の代りふ。水を能洗りたるふ海綿又を金く乾きたる海綿を用ゆる事あり。又呂ふをもバ脂の未或ひを「アラビヤゴム」の未を水にいさゝの飾る事もあり。又「スロム」俗ふ猿のこしかけの片屑若くハ木綿をいわつさゝをして用ゆ。さゝ甚上ふ巻布を結しておくを。或ひを手ぬぐひ、かなきんの風呂布を結たゝみ〳〵用ゆるもよし。「ロン」大抵をしら

ふゝ出血を止るものなり。若尚止らざハ。絶ず手くびの脈処を押へて居る事し。されども止らぬ事なれども

ものなり。

手を屈て腕の疵なら。肩の近とふ所どいよ〳〵大切なる者なり。手の先ばかりの疵なら。先を患なくなしとも。

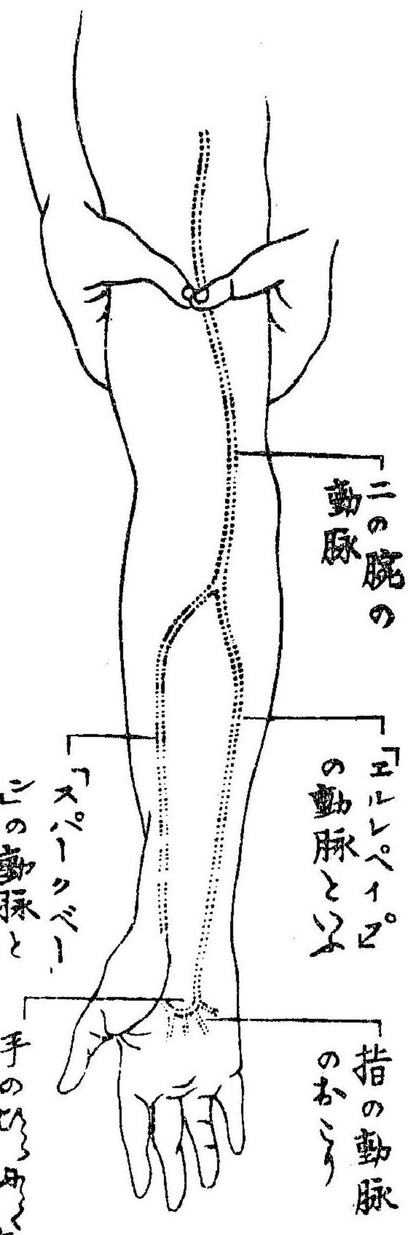
脈処及び腕より血の出る時 動脈の疵なら〻バかならがれ膏ふゝなら大ゆゝなら留ゝなら。手ゆゝ絶へ〻ず押へて居るゝ或ひなら「トールニケット」を以かけゝ。一旦出血を止め。切たる脈管を括ふ事し。前ゆゝ記なる如く。腕の動脈を両條ふねり手のゆゝゆゝ孤ふゝ相結るものなれバ。手

くびの脈処の動脈を。双方より血を以おくるものなり。との故ふ此脈管此辺ゆゝ切ふ時を。切きたる両端より血の出る事あり。されバ疵口の上下を以押申事き事なり。腕の動脈の切き口を以括ふを。甚だむづかしき事なれバ。手ゆゝ押へふゝ或ひなら「トールニケット」を以かけゝ。医官の来る迄待居し。押へゝ出血止りたゝバ疵口を以寄せ合せ。かさがい膏を以結ず。綿撒綜或ひなら木綿の切などゝ〻ゝ巻布或ひなら手ぬぐひなどゝ〻ゝ巻し。

脇の曲りの近所の傷 ふなら圖の如く二の腕の動脈を以絶へず押へて居るゝ。或ひなら「トールニケット」を以かけるなり。

腕の動脈の道筋ちいづこまでも押へらるゝものなり。或ひは腕の下なるも。押へ難き事もあるべし。

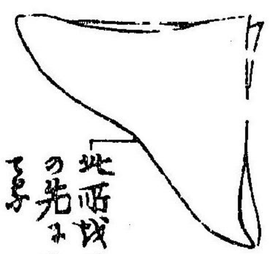
腕の動脈を初つける圖



腕の動脈戦傷りたる時ちは肩の骨の下の動脈其本根なきば。これ戦押へられば血を止り難し。此動脈ちは胸の上の方の骨の下ゆ從がひ。指ゆ肩の方へ挽てゆく時ちは此処ゆ低く窪みたる処あり。これ腕の辺探きば脈のうつ所ゆ探り當る筈。これ腕の下へゆく動脈なり。これは一番の肋骨の上ゆのりて居るものなれば。この骨の上ゆ初つくれば甚た押へ易きものなり。これゆく出血止らば。かゝるがん膏戦長き短冊ゆ切りて張る筈。

動脈のある処ハかならず脈のうつものなり。されど深く沈みてある処ハ手どなく甚弱し。事ぬき時ゆ

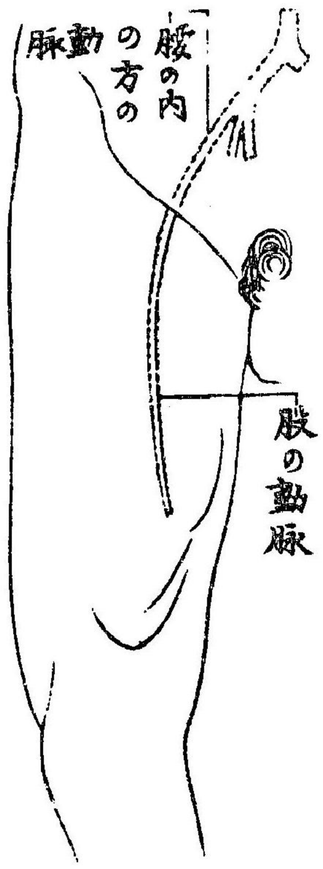
押し試こ。其行る処ゝ調ゞ。又ゝ医官ゝ問ひなゞ
て。脉筋のあゝかゝ心得てゝ。
疵ゝ巻布ゝ時ゝ。其処ゝ動く事ゝ
せゝ。
ゝ。又二の腕の疵の時或ひゝ「トールニケット」の掛てあ
る時ゝ。怪我人ゝ蒲團の上ゝ居しめ。脇ゝ延して
枕の上ゝ。枕ゝ怪我人ゝ歩行
さゝ。左の圖の如く布ゝ肩ゝ負ハしむ。
風呂しきゝの如き四角ゝ布ゝ向ゝ合ゝ隅ゝ取
りて二つゝ。折目のある方の中央ゝ手の先ゝ



け三角ゝふ角
ゝ脇の方ゝ
両端ゝ肩ゝか
け。ゝ
て結び合せ。脇

の外ゝ余りゝふ所ゝ。内ゝ折ゝゝ。手の先
ゝの疵ゝ。手ゝ
脇ゝ自由ゝゝふゝ
腕の動脉ゝ心の臓ゝ出て。腰の内の方ゝ傳ひ来る
ものゝ。左の圖の如く腹と股との間。陰処ゝ九指

三本ありて隔りなる処まで説。腰の内のやゝの動脈といふらんゝ股の前の方ふ至り。内股説後ろふ半回りわと回りちぐゝ下ゝ。膝の後ろふ至る。是まで説股の動脈といひ。膝の後ろの四ゝふ至りたる処説。膝の後ろの動脈といふ。此処ふて前後ふワの巻。膕と脛との動脈となり。肉の間ふ深くかゝれ。足の甲と蹠ゝふ於て弧ちゝふちゝて。双方相結



ゝ。これゝゝ小枝出て足の指ふ至る。手の動脈と同ド事ちゝ。此辺説足の先の動脈といふ。但し腰ゝゝ髮ふ至るまで。端ゝゝ細き枝説出して。周圍の処々ふ至る者ちゝ。脚の静脈ち指先等ゝゝ始り。次第ふ上り。股ふ於て一本ふ集り。腹の方へ返る。其道筋ち大抵動脈ふ添ふ者ちゝ。

足の指の怪我

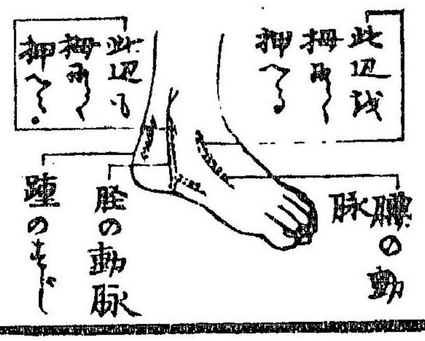
ち船中ふゝゝち数これあり。ととさゝ暖な る地方ふゝち。水夫どゝも素跣ふゝゝきゝ或ひち薄き履。又ち履下の莫大小。若くゝち襪のゝふゝゝゝ事もあるべし。鑿小刀ちど落来り。或ひち硝子の片隻等の如きもの説踏こゝ大工ち誤て手斧説踏む等ふゝ。思ハに痲説

受るものなり。其手當方は手の指の痂に同し。痂なる時は後ろ様。二本の指にて横に押へて血様止め。痂口をかもがひ膏にて二巻き巻き。前の法の如く手當様

足の甲及ひ蹠なりの出血

は止る事甚だ難し。こと蹠は肉多きものなれば。其間の動脈を見難く結び難しと。か一痂口様押へても尚其出血止まらぬ。腨と脛との動脈様強く押へ。其法先ず足様上に向させ。片手の拇指を内踝と踵の筋との間様押へ。今一つの手の拇指を腨の高き骨の前角なり。足の拇の方へ引きたる線の中み

於て。足の甲の上様押へふなり。腨の後ろの動脈を前後ゆつみ。前なる腨の肉の下様潜る。足の甲の上なり踵ハ。後ろなる腨の屈のいと。この下なり枝様生し。内踝のうきみ至て顕なり。平生なり押へ試る脈のうつ処様探り。心ふ記へ置べし。



とめ出血止らば。血様あひ落し。硝子釘等内みたまるものは取り除くべし。跗拔みくはかゆの物又ハ刺なと蹠の内の間ふ深く挟りて居るものなり。能

心に着べし。さて疵口に拭ひ。長きかまがひ膏に以て。疵の上より足の甲を回して張りあて。

膕脛の動脉の疵

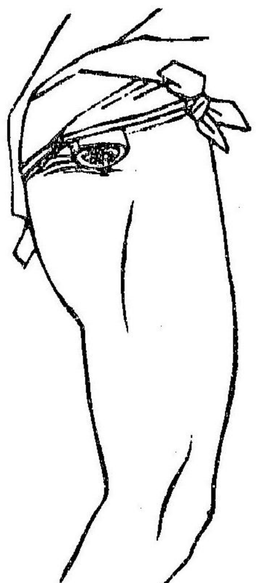
の動脉に押して。其出血に止む。脇の後ろの動脉を探り知り難きば。股の動脉に押へふに。此処ハトトーニケットに掛る。宜しき所なり。

外科術の療治に受るまて脇に曲さてあく事なり。

しかるして膝の後ろの動脉を一重み四重まきて故自ら押さて。此法を手の先又を脇ちどの傷ふし用ゆ。唯脇に曲げさてるのみ動脉を押さてものなり。

股の動脉の疵

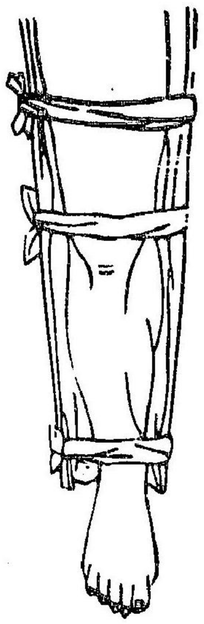
膕脛の疵と同じく股の動脉の本根に押ゆ。腹と股との取の処み。脉のうつ手ごとある故。假りに此処に押へ。其間ふトールニケットに用意。トールニケットを此処に二三寸下みるける。圖に見て知る。



此圖ふ羅紗ちどの幅一寸ぐらいある。に堅く巻つけて。動脉の処み當て。首飾りの紐みく薄。トールニ

ケット」小代用にするものなり。

出血止らざる短冊を切りたるかれ膏ぬり張る。手軽く丈夫なる巻布ぬ風呂。ハコンプレッス前出ぬ巻き其上を巻布ぬる最も良し。其後怪我人を蒲團の上に居らしめ。疵のある辺を窪屈なる事なきやうにしむべし。脚を都合次第延して和らぐ事もあり。脚曲てかくもらし。但し其時ハ膝の後に小枕ぬかい風。怪我人ぬ他所へ移す時。又ハ端舟に載せる等の時。其疵大なるゝ又ハ関節の疵骨の挫折等あるゝバ。脚に副木ぬ巻布ぬして送るべし。其法先ず疵口に巻布ぬし風呂布ぬの如き四角なる布ぬを巻き。其真中に足ぬのせ。細長き木ぬ一本づゝ風呂布の両端にわ。



轉しなるべし。風呂布ぬ巻いけ。脚に能くひやうにに風し。木と脚との間に透間あるゝバ柔なる布ぬ巻き。いひ用中風し。木に押付痛ぬ起る事あれバなり。其のち副木ぬ手ぬぐひなどの物に三四箇所薄く風し。股の疵脛の辺の疵に。腰まで當る事なり。臑脛の

痕ちゝバ脈の上二三寸の処まで〻十分ら。
切ごとき副木なき時ら。木の皮ち用る事あり。印度〻
ら蓋花果の樹皮も宜しといふ。木の桶又ハ櫛の底〻用る
事き事。或ひら鉛亜鉛も。怪我人ち他の船〻移し。又ハ病
院〻わくるちごみも。副木の代りふちるものち。
日本〻ら柳の樹ちよりもよし。或ひら移の板ち細
く切りたるも臨時の用〻ら合ふべし。ちとる肉ふ
當る処〻角ちき〻ち〻〻。刺〻心ち用ゆべし。古き板
ち用る時ら。釘〻心ち着べし。菓子の折の白き木ら最
臨時の用〻ちる者ち

動脈ちり出ふ血。右の法ち用ゆと雖も。或ひら押へる道
具手元〻あゝ炎。又ら動脈のある処たしら〻知まで
て。押へちふ效もちゝ出血とかゝ止らざふ時ら。或ひら
綿撒絲。或ひらきめのこまの海綿ち厚〻布刻絲。から
がに膏ち其上〻張りめぐらして。洩ちる処ちきちふ
し。医官の来ち待つべし。
肉の間の小動脈又ら皮の小動脈ちとり出ふ血ら。ち
バ〻られあるものちれ〻。大やうら膏藥と巻布〻
てちやゝ止るものち。
頭胸腹の痕より血の出ふ時の心得

頭及び頸の動脈を咽のところ氣管の左右にあり。心の臟の血これより頭に至る。掐と食指にて氣管の両わきを探きバ甚強く脈のうつ処あらふ所し。これ頭の動脈なり。此動脈は頭の半ばごろの処にて左右おの〳〵二條づゝ ふわのき一條は内の方脳眼及び耳の内の方ふ血を送る管なり。又一條は外の方の動脈まゝ数多の枝に立別き舌顔頤又ハ頭の後のやゝ耳の外側等へ血を送るものなり。静脈は頭の内側にも外側にもあり〳〵。頭の血を心の臟のやゝ〳〵へ帰さゝ。頭顱に疵を受る時は夥しき出血ありて速に救ハざれバ危ふくなる事多し。疵浅きときは顱より外の肉の血管のみ血を出し。深き時は顱骨脳膜よりも出血あるものなり。顱骨の外の動脈は直ちに骨の上にあれバ。其切きれる端は動かし易くゝ。これにてこれを括る甚難し。疵口若しくは其近所にゝ押へふを易きものなり。頭の後の方の動脈又は耳顳顬等の動脈もまた此の如し。

疵浅くして骨までとゞかざる時は。血を押へゝ暫時出血を止め。疵小なれバ周囲の毛髪を鋏にて剪り。かさぶた膏を塗し。其幅廣きものハ。其大小に応じ二れ針

或ひは三針を縫ひ合せ。あつとも指にて押へ〳〵其出血止まざれバ。此法いづれも行ふ事能ハず。其ときは「キュルク」の徳利の丸く切りたる口木の巻きたるなど。幅一寸ばかりの紐にて頭ふ薄りつけ。動脈を押さへ。又ハ首飾りの紐の中ゟ一ツ二ツ結び玉ゟ。この紐動脈ゟ両端を巻き紀のゆうゟ後ろゟまわして。なるべく堅ひゟ。再び前ゟ取り元の処へゟどし。結び玉の上ゟ結ひ止むべし。其疵深くして顱骨ゟ傷きたる時ハ。血ハ骨の間の海綿の如き所ゟ出で。骨の内ゟ脳膜の動脈ゟ

も出るゟのゟ。其時ハ黄蝋若くハ「キュルク」ゟ尖弾の先きのゆうなるゟの疵作り。ゟ疵通し。其疵口の開きたる処ゟ詰ゟ。骨の間と骨の下とゟ出る血を止めしむべし。

黄蝋ハ

かゆうゟ削るゟ。疵長けれバ

此の如く削りて用ゆ。いづれも細きゟ疵下ゟ

ゟ。

ゟ疵口開き〳〵甚だ広き時ハ。其上ゟ尚海綿疵ゟ

ゟバ弥ゟ。さ〳〵其疵総躰の上ゟ。上ゟ海綿疵ゟ

手ぬぐひ抔にあく練り合わす。顔の疵に大てい其疵口廣く開き夥しく血の出るもの に速み手あて法に血出ず。又氣管み傷つく時に咽の疵に速み夥しく血出ず。或に呼吸に塞ぎ。或に氣管み血の流れ入る事あり。此処の神経に疵に着け。其側に大静脉み風に引る 等みな忽ち命に障る事多し。

つ事まに速み其疵口に冷水みあ洗ひ。氣管に其 傷あり。皮肉に合せ縫ふ。

元或に頸の左右の疵に。咽の疵に。危急のもの に横に受けたる疵に。血管に切る事 あり。頗る大事み及ぶ事あり。頸の大動脉に切る時に 出血に止む。危し。其時に疵口又に其近所に押へ速み其 血に止む。但し此処に強く押さず みに堪へ難し。其心得 く。又久しく押さず みに堪へ難きものに。其心得 く押ゆる事に。此時に血管の端に括る法 良方に速に括るべき事に。頸の静脉の切る時 に。かに其両端に括る。一端に血の流出に止る が為み。一端に血管み爪の入る法防くがため に。

凡そ咽喉或ひは頭部の左右の痕跡めり。右の如く手あくして後頭部にまで布巾にて前髪のあと布巾前髪のあたりまく帽子針みく止め。頭ハいさくこの布巾。又長さ凡そ一尺六七寸にて幅一寸ばかりの帯みかけ。其両端を腋の下より後ろにまわし。脊みく結び俯すべ。両手を首飾りの辺まく。胸に引つけ。両膝かりみ結びく止む。さく怪我人を蒲團の上み居らしめ。頭を動かざるやうみ。ひもの巾にてゆわく屈し。怪我人をなるべく動かざるやうみすべし。医官の許なくみあらざれバ飲ものを與ふべからず。自殺せんとなる咽の痕ハ。射技自由みならぬゆゑみてゆわく番人の居らぬ時に一と引みくこの括り布巾ゆるめ。直ちみ死に至る事ハくなれあるものなり。凡そ血管内の間み引きこまれ。ときく。又ハ突痕なるま痕ハ血管の端巾引出し難き時ハ。前みいひたる如く黄蝋「キュル」の類巾先細く削り詰めものとし。其出血巾止め。其上みかぶれ膏巾粘るべし。

胸の痕を唯皮肉ばかりの時と。肋骨までとどきたるまでみく絶ひ皮肉の動脈巾傷りたるのこの時を命み

かゝるわざの事あらんには先づかまの膏にて粘
〳〵疵口にて塞ぎ其上に綿撒添にて布きつゝ祢或ひは木
綿の切きにて重みもたゝみ〳〵らんにて當て又他の木
綿の布にて〳〵られ覆ひ後しろまいして結び止め
わゝ死し。

胸の中まで通りたる疵又二ツあり胸の内に入り
て臓腑にゆゝ〳〵ぬものを猶可なり肺の臓心の臓に
ゞみ疵つきたるもの此上もわゝ危しとも心のさゝハ言
み及ゞゞ其辺の大動脈大静脈にて傷りたる時も出血止
まゝゞて忽ちも死みいたる事多し出血の色薄くし

て清し泡たち咳嗽上るゞ〳〵涌き出るものハ肺より
出る血なり。これまゝ甚ゞ危し。たゝ〳〵肺と心とみ疵つ
うゞ〳〵肺の膜と胸の膜との間のたゝきすみ突き入き
たるも空氣にて〳〵吸ふ〳〵命みつゝふたゝゝあるも
のなり。

凡そ此の如き怪我人も真の医官みあゝざれバ取扱ひ
難きものなり。されバ士官の手みゝ〳〵能く外の疵にて塞
き〳〵空氣の入ゝぬゆゝうみし。医官にて待つ間し。外の疵を
塞ぐみも。先つ其怪我人の呼吸み氣につまり其引く息の
止りふ指みゝ〳〵疵口にて押へ。空氣の洩ゝぬゆゝうみ〳〵

かゝが以膏又ハ「コルロヂラン」ハ粘り。外の空氣の透り入る事ハきゆうゐ。或ひハ膏と「コルロヂラン」と共一時ゐ著ける事もあり。さて其上ゐ卷布ハしてわ〳〵ゐ。此の如く手あゝの出来ハ後怪我人ハ安坐させ甚〳〵動く事ハ禁し胸ゐハ冷水ゐ浸したる布ハ當わ〳〵ゐ。又怪我人ハ医官の居る方ゐ送るゐハ其胸の疵いさゝゐのゆうゐ見ゆるゝ。決して忽ゐなる事ハ〳〵厚く心を用ゆべし。大てん乗り物ハ〳〵ゐ載せ〳〵擔ひ行くゝもゐ〳〵ハ。きたなき手怪我人ハ〳〵して無言ハ〳〵もゝ一。

腹の疵

ハ臟腑まで通らぬハのハ命ゐかゝゐの事ハ出る時ハ。太きものハ〳〵バ其血管の端ハ捨て。疵口ゐ長きゝゝがハ膏ハ粘ゐゝ。さ〳〵怪我人ハ脊ハ倚せらせ。腑ハ立て坐せ〳〵め。腹の皮のハるむゆうゐ。疵口ハ冷水ゐ浸めハる布ハあゝ。其上ハ幅ひろき紐ゐ〳〵縛りわ〳〵ゐ。

臟腑まで通ハふ腹の疵ハ。もつとも危のき深手ゐゝゐ。其疵口ハ腸或ひハ網膜ハど吹き出ハる時ハ怪我人ハ脊ハ倚せ〳〵ハ。腑ハ立て。腹の皮のハるむ

ゆゝ小坐せしめ。生温き湯にて其臓腑を洗ひ。指の先を油に浸して。用心して。そゝ様疵口の中へ徐に押し込むべし。其のちの耻扱ひ方は前の如し。

胃肝脾腸腎膀胱大血管に傷を受てとれより食物胆汁糞尿等洩き出る時は。多くは死に至るものなり。休まゝおきゝとも我守りは。心を付て居り。其後いろ〻なる事の出来るは待つべし。

衄血

衄血の耻扱方

衄血は大てい恐るべきものにあらず。又止めがたきものもあるとつゝ。亦たゞふるうて驚しく血を失ひ。身躰の害となり。終に死に至るものあり。若年多血の人。鼻を打ちたゞして出る衄血を患るに及ばず。又多血の少年血多く頭に升り。頭痛したる時なども亦在るゝは。却て衄血を出すこと。熱病にて自然力の狂ふたる時は。衄血をつゝ妙用なり。凡そ中ちたる時は。とゝに止るは却て悪し。衰弱したる人疲たる人まゝは腐敗熱悪性の神経熱瘧ケウルボイク等を患ある人に於ては。なほ速に止むべし。大抵の人は。衄血の出るとき。とかく頭を下にさげるものなり。衄血は俯めばいよ〻甚しく出て止らぬものなり。

鼻血止るまを。帽子、頭巾、ちりまゝたちぐの如き頭及び頭に押つけ又ハ煖むるもの共取り除き。涼しき風に其室よいき。あるひハ病人を涼しき所へ連ゆき躰に直くし。両肱に揚げて坐せしめ頭ハいさゝ高くせらるゝ。

ゝれハ咽の中へ血の流れ入らざるためなるべバ。あまり甚しかゝるやうなるべし。さゝ栓と食指とをゝ鼻に

つまみ。海綿に水銃ゆゝのものみゝ額より鼻の上へかけて。冷水に洒ぎ。又布に冷水みを浸して頭の上ふあてる。ゝれみなりて血をおのづゝ堀りて鼻の栓とる。ゝれもゝ其血尚ゝぎ

明礬を冷水ふ

溶してこれを鼻の内みを洒ぎ或ひを明礬の末に小さ紙

ひみゝ鼻みをゝひとゝもむべし。出血止るゝも猶ほ暫の

内を病人に動の事なゝ。頭を直ふして扇き。冷水に

布みをめして頭に冷さしむべし。

血止るまを。明礬水ふ綿撒線に漫して。これに鼻

みかひ。又一ひゝの紙を口中みかむもよし。

水蛭の疵より出る血、止ゝざる時の手當方

水蛭もし皮の小動脉み食ひ當る時を。水蛭の落たる後

ふ。わびゝ〳〵しく血の出る事あり。疵の近所に洗て

見るべバ其血の出るロを能ワこるものあり。大抵を冷水

又ハ「アラビヤゴム」の末ヲどゝ。血を止るものゝ
ゝられ〻〻〻尚止ら〻ハ。疵口の横より針ヲ突通し。其
針の下ヲ絹糸ゝ〻〻〻るゝ〻とまき。かさ〻ゝ血ヲ
止るなり。又やき小手ゝ〻〻血ヲ止ル事也あり。

刺絡後の出血の手當方

刺絡の後一二時ハ〻ゝ〻〻〻の疵口より。思ひ〻ゝ
血の出ゝ〻〻事あり。ハ衣類ゝ〻〻腕の下、二の腕
ゝどの静脉強〻押さゝ。或ひゝ〻〻〻脇を動かした
るゝより。疵口の巻布いぎりて疵口より奥の静脉ヲ押
し。ゝれゝゝて再びいゝ〻始るなり。其時ハ先つ巻布ヲ

解き。押〻〻ある衣類を取り除けバ。大てゝゝ血ヲ止る
ものなり。さ〻〻押ゝ〻〻刺絡の疵口のいき、この下の方ヲ
押へ。血ヲ洗ひおゝ〻〻水綿の切ヲ八重ゝたゝ〻みゝ疵
の上ゝ當て其上ヲ拇ゝ〻〻と押し付け巻布ヲ互ひ
違ひゝ脇の上下ゝやけ。疵の上ゝ〻十文字ゝなるゝゝ
ゝ。其後脇ヲ動かゝ事なきやうゝ。布ゝ〻〻ゝられ肩ゝ
かけさゝ〻〻おく〻〻し。十八枚目の圖の如くなるし

頭ヲ撲て氣絶したるものゝ取扱ひ方

九ヲ〻高き所ヲり落て頭ヲ撲ち或ひハ頭ゝたまゝゝ〻ヲ
受る等ゝ〻〻氣絶する時ハ。多くハ手足其外の疵。又ハ骨

の挫折等ハ兼るものなり。

船中ハ小船具より過ぎて手ハ甲板ハ落ち。又ハ甲板の出入口より中層ハあり。或ハ船の揺る時重きもの頭上ハ落来り。まんまるきのもの。帆綱きれ〳〵帆ハあるべき若しくハ甚しく揺るく船ハ。大砲其外の重きもの動き出して。ふれおため〳〵たるべく等より。此怪我出来るものなり

其怪我重きものハ全く氣ハ失ひ。躰ハ動く事なく。眼ハひらき。或ハ半塞き。呼吸ハ幽かして遅く。或ハ呼吸せざるやうハ見へ。躰の温まり次第ハ減し。速ハ屍の如く冷くなるものなり。或ハ覚へず両便ハ分泌する事もあり

其軽きものハ全く覚へなくなるまでハ至らず。あるハ一旦氣ハ失ひたるも速ハ氣のつくものなり。然るに耳鳴胸のあしきもの。或ハ眩暈耳鳴胸のあしきもの患甚しく。又ハ発汗しなら嘔く事もあり。又ハ背の内ハ。其上頭痛甚しきものなり。さまざまの頭痛ハ別ハ害ハのときにして。自づから次第ハ治する事多し。

此怪我ハ重きものハ。次第ハ総身麻痺して速ハ死ハ至る事多し。尤おのづから回復する事もまれにあり

らぶ。

我が相識るもの。撃劍の稽古せしとき。面にて打落されたるに。後ろ仆き後脳にて強く撲ちたり。氣絶せしほどあるにて。さほどの事とも見へざりしが。其月の黄昏より発狂し。一二月の間治せざりし事あり。

此怪我人にて取扱ふ法は。先つ怪我人にて暖なる室に移し。其落る時疵にて受たる処あるに依て。骨の挫折あるもあるべし。能く穿鑿し。もしかゝる事あらば。心にて用ひ其手當にて怠るべからず。衣類は無忽みだりに丁寧に脱せ。切疵打疵うちゝ身挫折等あらば。蒲團の上に夜着にて左右に置き其間に怪我人にての頭はいさゝか高くして即しあるべし。さゝ大なる陶に熱き湯にて入れ或ひは熱き砂にて嚢に盛りて躰にて温め。又は温き布にて躰にて摩擦し。「オウデ、コロニー」といふ香水又は硼砂水にて如き参高き薬にて鼻の下にあてゝ持て居り。別に「ホフマン」精二十滴にて清水二たゝの内にたらして。とき〳〵飲ましむべし。初に水蛭にて着け。或ひは冷水にて頭にて洗ふなども皆あるべし。

病人氣息にて取戻したる後ちゝ。ぶの脳の活動非常に強くなり。熟にて和して譫語にて発するあり。その時

耳孔に入れたる湯または脚湯を冷水にて頭をあらひ。耳の後に水蛭をつくべし。

打撲切疵骨の挫折等を蒙るものは。其取扱ひ方前に記したる法の如く手當をなすなり。挫折の事ハ後に出づ 但し流血に氣を失ひて居る間に於ては。其勢甚だ弱く脳の活動立ちざる時なれバ流血の勢ひ却て常よりも鋭くなり出血を止る事甚だむつかしくなるものなり。また氣を失ひて居る間に。肉にも覺なくして。肉の力弱ければハつがひの離れたる骨及び挫けたる骨などが常の位置に直るも甚だ易きものなり。されバ氣絶して脳の

はたらきいまだ立ちざる間に。血管を括りて挫げたる骨つがひの離れたる骨なども直すがよしとなす。

挫折の取扱ひ方

挫折に二種あり。骨のつがひのはなれたると。骨を打碎きたるとなり。骨のつがひ離るゝ時は。これによりて其手其足の形ちを失ひ動かす事難くなる等さまざまの害をおこし。骨の碎けたるは。其近所の肉力を失ひてはたらき心に任せぬやうになるものなり。

これを治するには。其はなれたるつがひを元の如く連ね。折れたる骨を相接しむるにあり。其法其つがひの離れ

又ら折きたる骨ばかりうふ引き出し。元の如き位置ゐ直し。つがひの離きたるゐら。再びもとづきざるやうゐ巻布ばし。骨の折たるゐら副木ばして動あざるやうにねしわ〳〵ゑし。

近ごろら。骨の折たる時ら。粘ねど厚く塗りつまりて。其上ゐ巻布ばする法にて。副木の法ハ用いざる事とたりたきこと。怪我人ば他所へおくりやるとき。副木のかはばしとき。九そかやうたる怪我ゐ於てら真の療治ら医官ゐ任さるべき事まして。それまでの手当よとて。かやうゐしておくる事なれバ。粘ばぬりたる法ば用ゆ

きバ。ならんば解くこと易からざれハなり。

骨のつがひの離きたる骨の破きたるとき。見分難き事多し。されバ医官ゐつたるもでら。つとめく其挫折ある処ゐ益理たる事なきやうの手当ばもべし。ときゐ骨の破きたる時ら骨いさて。この動きても甚しく痛みば起らし。さまく〳〵の害となるゆゑきバ。其心得ゐく巻布ばし。骨の動く事なきやうゐし。他所へ移さるゐも都合よきやうゐしべし。

都て腕の挫折ばら。第十八枚めの表の圖の如く。布ばかけく肩ゐ負ハしむる事最もよし。二の腕の挫折ゐら

其上ゟ副木三本ニ用ひ巻布ニ巻し。脇より前の方の挫折ゟ。幅廣き副木一本。脇より手頸の先までかけて薄る様し。尤も挫折ける処の近所ゟ。副木ニ当る前ゟ先つ真綿或ひゝ木綿のゝ綿撒孫ちゝ様ニ摩く布列祢く。其上ゟ木ニ当つ様し。扨ちき時ゝ草ニ刈り。又ゝ柔らかき木の葉を取りて。綿ゟ代用する事もあり。脚の骨ニ挫折ける時も。其取扱ひ方ゝゝゟ同し。副木の圖ゝ弗二十二枚めの表ゟ出ス。引合セ見るべし。この時もまゝ。副木と脚との間ゟ綿ニ摩くやひ動かぬやうゟ縛るべし

肉ニ撲て痛ミニ成起し或ひゝ腫ニ成起し。又ハ挫折ゟ痛ミある等の時ゝ。冷水ニ成洒ぎ。或ひゝ冷水ゟ湿しける布ゝ慶ゝ様で。巻布ゝいさゝ この後やうゟし。余り堅過ぎざるやうゟべし。

火傷の取扱ひ方

火傷ゝ。其時の火の強弱ゟ。焼かるゝ時辰の長短ゟ皮の上のゝつさゝこの嫩傷を起こし。強きゟ其近所の肉都て爛る。ゟ至る。

船中ゟ食用の火焚処甚ゟ狭く。ゟ夜昼大ていゟ絶間なく火ニ成焚く故ゟ動かれバ爰ゟ火傷ニ成

事あり。蒸氣船ハ蒸氣ヨリ出ル鍛冶場ヨリ出ル鞴の火ハ蒸氣ヨリ出ル。或ひは大工揺ル船ハ処々の焼ひ塗り場ニて居る時ハ沸騰する瀝青とゞまりて。これ故ハ火傷し。又戦争ハいふ及ハ。操練の時ハ。火藥のため怪我場ある等なり。近年「ヤムビー」といふ川ハ。小舟ハ藥りて上陸した時ハ地雷火不意ハ発して。これ故ハ士官一人卒十一人重き火傷場ーなり。又「ボルヲ」といふ島ハ。支那人其塞の内ハ火藥場多くまきちらしあきし事あり。其時ハ数多の人火傷場蒙りなり。

凡そ火傷ハ只表皮のみハ深く肉まで及ばざるものハ。其場処甚だ廣きものハ。燃衝熱場発し。或ひは肺心腸腦等の燃衝場ハ発を事あれバ。自然命もかゝる事あり。其場処いよ〳〵廣きハいよ〳〵危しとす。燃衝ハ其処赤き色なり。熱甚だ〳〵して。腫ものいたむ症場いふ。火傷ーなる時ハ。其近所ハ此の如くなるものなり。燃の字ハ火面ハ書くハ火傷ハ似たる病なれバなり。蘭語ハ「オントステーキンフ」と火場焼きつけるといふ字なり。

火傷の怪我人ハ取り扱ふの法ハ先つ能く心ハ用ひ衣服ハ脱しむべし。多くハ表皮ハ肉ハ離れ衣の裏ハ粘着するものなれバ。心ハ能く衣ハ脱ぐ時ハ皮ハ剥ぐ事あれハなり。衣ハ縫ひ目ハ切り解くべし。莫大小の襦袢ハ着て居るときハ鋏ハ剪りて丁寧ハ脱ぐべし。其間ハ指の先ハ水油ハつけ衣ハ粘つきたるハ皮ハ剥ぐと衣と離るべし。火膨の出来たる時ハ横ハ剥して其水ハ取る事なれども。表皮の剥ぎぬ中ハ用心すべし。

火傷ハ冷水ハ浸すハよろしけれども中ハ温きもの最も止てるあしゝ。水ハ日向水位のもの温きもの最も宜しく熱くハ取り換申候。尤側ハ冷水ハ当てバ自ら変る故ハ火傷の処ハ水ハ出ハ及ばず。いさゝかの火傷ハ指先などの如きハ薯蕷又ハ加ハ玉ハ当ハ初ハ。これハ付。或ハ「ポルトガル」油ハ油ハ療治すべし。火傷したる処ハ硝酸銀ハ塗りつける事最も宜き法なり。

場処廣く火傷したる時。及び内深く焼たる時ハ寒き風ハ冷水ハ大毒なり。ゆえに時ハ水油ハ

其処を塗り。又ハ地細のかるきんの切を以油を浸し。こを布つゝ祈。其布切ハ医官の来る迄待て。其上を綿を覆ひ再びこれを油ハそゝぎ。

蒸氣ハ吸こゝ。熱き食物ハ喫ひ。沸騰する湯ハ飲む等を

て内臓ハ火傷ハ最も危き怪我なり。或ハ急を呼吸つまりて忽ち死する事あり。或ハ粘液膜ハ火傷ハ口、咽、氣管の内を烈しき燃衝ハ発して。遂の間を死する事あり。

かゆゝの事を志バ〳〵とれあるものを非ず。最も速を手当ハ為る事なり。大てい蛋白と油と水冷水を

攪ぜ。又ハ此二ツの内の一つハ「アラビヤゴム」と共を水を攪ぜ。口中をそゝぎこゝ。或ハ口を含ましむべし。其軽きものを冷たき「メルキ」牛乳ハ製し度々飲ましむべし。

撲傷の心得

撲傷を冷水を浸ハ布ハ度々取りかへて当てしべし。

骨のつがひハ撲たる時を。其処の動を止めを。

腕ハ〳〵バ十八枚めの圖の如く。肩を負ハ〳〵むべし。脚ハ

ハ歩行こゝハ禁じ。居ゝ〳〵ハ〳〵べし。

眼球撲て其辺み瘀血受け。又ハ烈しき衝撃発したる時ハ。始めハ目球祈むるせ。「コムプレス」球水みをあして覆ひ。或ひハ明の通るうすき布球あり。度々冷水みをあてしめ。

内臓のおもりゆるくして。位置あしくなりたる時の心得

股、腰の内の方、睾丸の内ハ子細ある人ハ。巻布球ていねいに巻みて。此巻布の仕方宜しきを。又ハ勘弁なく巻布球解き。或ハ躰の力を用ゆる事強く。或ひハ高き処より落ちたる時。内臓のおもりゆるくして。位置なくなる事あり。これ船人に多くある病なり。

股の上、腰の内、睾丸の内などみ脹球発し。押試るにバ甚ど痛み。腹悪く腰痛されど刺なく。嘔吐甚しく後ハ清水球吐き。其次ハ胆汁球吐き。終ハ糞球も吐出せみ至る。これ皆此病の徴候なり。

其手当ハ。右のごとくおもりゆるくして垂れ下りたる臓腑球。ぬきなるを速みに内の方へ入れ。みあり。其法先つ病人球。仰て。脊球後ろへふとんをかけて坐せしめ。脇球立させ。腹球十分みたるまでかきさすべし。つぎに腹球押し。又ハ摩擦し。陥りたる臓腑を元の位置へ直らせん事球務

む。但し此時病人をして暖なる室に居しむ
べし。此時大なる泡の消ゆるやうなる音きこえざるば。
臟腑もとのごとく戻りたる事と思ふべし。との音は腸の内
にできたる氣泡なるゆゑ。この時直ちに
巻布団。尚ほ此間は臥床に居らしめ。前の諸症と
とゝく消失する待つべし。さもなくば士官の手に
も思ふまゝ行ゝ難きものなれば。時みとりても
其破裂したる処切断し。臟腑の位置を直し。死を救ふ
ことも有るべきなれば。かゝる真の医官に見せる事を
忘るべからず。

186
206

發行書林

大坂心斎橋通り
仙川屋善兵衛
敦賀屋九兵衛
浦惣屋茂兵衛
小城屋佐兵衛
浦惣屋新兵衛
岡山屋嘉七
和泉屋吉兵衛
和泉屋金右衛門
浦惣屋伊八
岡村屋助七
川崎屋宗
和泉屋半兵衛
鶴金屋清吉板

江戸
芝神明町
柳山町
藏前通り二丁目
下谷数寄屋町
本町三丁目
日本橋四日市
小石川大門町

186
205